

第16回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一六回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで三六〇名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月三日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

現代詩賞の授賞式は、残念ながらコロナウイルス流行の勢下中止させていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第一七回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。お待ちしております。

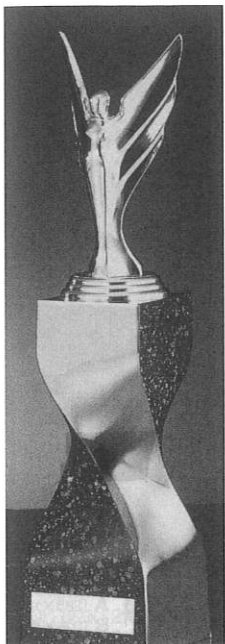
「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第16回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「デジタルトランスフォーメーション」
「液晶の窓」 「AI」

柏原 宥 (埼玉県川越市)



奨励賞

「花をひらく」 「失樂園」 「春夏秋冬」 「橋省吾 (埼玉県さいたま市)

「禍」 「獣」 「金平糖」 麻生ゆり (神奈川県綾瀬市)

「蒼むめた夏」 「山桜」 「2020」 「茜色」 「遠藤芳子 (東京都狛江市)

「亡骸」 「微睡」 「星夜」 十路田道広 (福岡県福岡市)

「ピリオドの奏楽」 「さくら雨」 「桃」 「石井春香 (大阪府高槻市)

「稜歌」 「渡悔」 「夏韻」 井上珠希 (千葉県市川市)

「晩餐の風景」 「窓辺のアユカ」 佐々木着馬 (東京都世田谷区)

「禍」 「ショートカット・キィ」 「みたくもない夢」 タダノヒト (神奈川県川崎市)

「かいな」 「のたうつ」 潮江しおり (滋賀県大津市)

「拝啓の手前で」 「遊戯の暗騒」 「すべての遠い微動するもの」 柄摩くべる (千葉県木更津市)

優秀賞

「母の骨」 「夜を泳ぐ」 「最期の日」

茉莉えま (岩手県盛岡市)

「十一面観音」 「聖林寺」 「火炎土器」

「花の眠り」 清水一美 (東京都立川市)

「業火」 「裂孔」 「青味泥」

薬師丸怜央 (茨城県取手市)

「星下」 「循環」 「グレーゾーン」

白神つや (埼玉県さいたま市)

「0527」 「らふランチ」 「定例会議事録」

洛田二十日 (東京都江戸川区)

「やさしいいきもの」 「ネオの詩」

「死別」 シーレ布施 (兵庫県西宮市)

「余熱」 「分かつ」 「Routine」

中村郁恵 (北海道札幌市)

選評

詩の余白、詩の言葉

松尾真由美

詩を書き続けていると体感的にわかってくるものがある。この賞には長年にわたって応募してくる方もおられるので、わざわざ言うまでもないことかもしれないが、詩にとつての余白の重要性は看過すべきことではない。ただセンテンスが変わるから行替えするときというものはなく、書かないことを語らせる、そうした効果も余白にはあり、余白があるからこそ言葉から言葉へのつながりを飛躍させることができる。また視覚的なことといえば、どう余白を見せるかという造形的嗜好も加わってつくることもある。散文詩であっても四隅の余白をどう作るかを作者は考える。一行何文字にすればどれくらい余白ができるかは練れた詩人ならば想定済みであるだろう。一篇の詩においての余白の重みを、書き手も読み手も忘れてはならないし、造形的観点からもイメージを追求するという作業にしても、詩作品は美術と無関係ではありえない。

括られてもいる。歌というものも詩に加えられることを鑑みれば、言語芸術という大仰な物言いはせずとも、詩には音楽的要素も美術的要素も入っていることは事実としてある。こうしたもろもろの要素が絡み合って、言葉によって言葉を越え出るものたちを表現しようとするのが詩作といえる。初心者の方にはわからないところもあるだろうが、詩について、こうした考えがあることを頭の片隅にでも置いてほしい。

講評に入る。当選作の柏原宥「液晶の窓」はシステムエンジンニアならではの危機意識が創出される。コンピュータは便利なものだが、人の能力を超えていく力が社会の構造さえ変えてしまうという危機を、言葉を省略することで説明することなく訴える。この事象は世界中を覆う大きな問題であろう。「距離 時間 質量」と淡々と言葉を置くことで重みがでるのは、余白の力と言いたいことの力の均衡がとれているためだ。数字もまた魅力的に詩に溶けこんでいる。バランスが良く、専門性を独自の個性として詩に生かす好例ともいえるものだが、詩として大人しい印象も受けるので、この先はもっと専門用語（読者がわからなくてもよい）を入れこんで、それに対応するように詩の言葉を躍らせていくことも方法の一つかと思う。

優秀賞の中村郁恵「Routine」もこの作者独自の個性が際立っている。実用性のあるものから観念を引き出し、身

そして、この余白に応じるのは詩の言葉しかない。余白に造形があるのなら、当然詩の言葉も造形という観点が否応なく関わる。だから、構築という表現も詩言語には使われる。同時に作られる余白と言葉。もちろん、言葉が先になるのだが、余白の呼吸と言葉の呼吸が一体となったとき、詩における作者の内部世界が動き始め、こうした余白を持つ詩の言葉で作られる内部世界は常識的な外部世界とは違っていく。だから、詩の言葉のありようも作者それぞれ独自のものを生み出していい。詩は怖ろしく自由であるのだ。詩の中で「誰が、いつ、どこで、何をしたか」を説明することもなく、山本陽子のように言葉自体を壊すことも可能となる。物語詩もあるが、散文をこなしつつ詩的感興を呼び起こすには相当な技術がある。思ったことを書くだけならば日記ですまされるだろう。詩の発端は日常からくる実感だとしても、詩の言葉はその先を探っていく行為である。

言葉を練り出す行為が本人の意図から外れて、意識下のものを掘り出していく行為こそ詩の言葉の自由というものが、ここには内的リズムによって言葉を運動させていくという音楽的要素も加わっていく。なだらかだつたり滑らかだつたりする心地よい言葉の流れは、ある種のフレーズとして読み手の心を揺さぶるし、発語や発話という呼吸の感覚は作者の身体と直結する。自由詩も詩歌という分野で近なもの触感を詩的世界で膨らませる。何を書いているかわからないという感想もあるが、むしろ美しい言葉も使わず、表現も柔らかく、味読に耐えられる詩作品といえよう。ぱっと読んでわかる作品は詩の面白みに欠ける。発想や発見が詩にとつて大事であつて、「吊るされているきみ」が箒のようなものだとして、このような展開を迎えるルーテインは素敵だ。練り返せざる得ないものの手応えが詩によつて輝いている。

優秀賞の白神つや「循環」は言葉の流れが非常に良く、言葉を練り出すことで先の世界を作り出すことに成功していると思われた。親と子の血のつながりを「僕らの身体に住んでいる父と母」と表わすことでの発見があり、「僕が発生したときにあなたたちから奪った多くの」という発想も新鮮で、作者独自の視点が素直にめぐっていく感覚が天体ともつながっていく。括弧内の言葉はなくていい。括弧をつけることで説明的な言葉を入れこんでしまっているところが惜しかった。

優秀賞の清水一美「十一面観音―聖林寺」は書きたいものが定まっている作者の落ち着きの中で、厳かなものへの畏怖が言葉の端正さを生み出して、詩を書くことで世俗の芥を浄化していく様態が、詩を読みすすむ読者にも移っていく。清浄なものが清浄そのままの風景へと転換され、光があつてもどこなく闇の底で安らぐ感触が好ましく思

われた。

優秀賞のシーレ布施「ネオの詩」はネオと僕の物語が爽やかに語られる。ネオとは新しいとか近代とかの意味合いも含まれるが、響きだけでも心地よい。森林の風景も独特に表現され、二人を囲む異空間が少しずつ動いていく様子も、二人の想念の動きと一体化して、行くことと行かないことの相克を何気なく描いている。目の痛みが若さの中の一つの傷として印象深く、終わりの会話も詩的な余韻を残していて成功している。

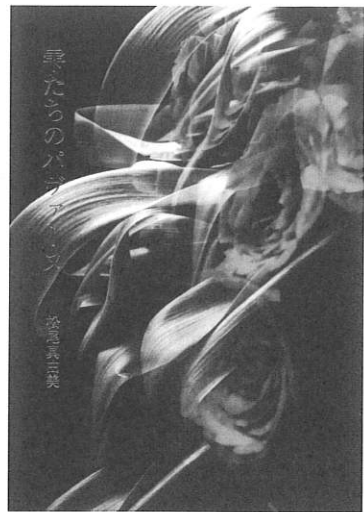
優秀賞の薬師丸怜央「業火」は「ボツボツ」という擬音が効果的に使われて、作品自体の激しさを膨らませている。撰氏への度々の灼熱とは原爆のことだと思いが、その阿鼻叫喚の切迫感は一瞬に作品を覆っていて、カタカナ表記も漢字表記も地獄を描くための必然だったろう。そうした説得力がこの作品にはある。ただ、小指や親指という細部が出てくることの違和と、「群衆」と「おまえ」が出てくることで視点にぶれを感じさせる。指やおまえを取った方が大きな災厄を大きいままに表現できる。



松尾真由美

まつお まゆみ

- 詩集『燭花』（思潮社）
- 詩集『密約—オブリガート』（思潮社）第52回H氏賞受賞
- 詩集『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』（思潮社）
- 詩集『彩管譜—コンチェルティーノ』（思潮社）
- 詩集『睡溢』（思潮社）
- 詩集『不完全協和音 consonanza inperfetto』（思潮社）
- 詩集『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊のはるかな記憶を』（思潮社）
- BOX詩集個展用パンフレット詩集『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』
- 現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）
- アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）
- 『小野十三郎を読む』（思潮社）
- 『短篇集 夜』（驢馬出版）
- 『ふるさと文学さんぽ 北海道』（大和書房）
- 詩集『花章—ディヴェルティメント』（思潮社）
- 詩集『雫たちのパヴァーヌ』（アジア文化社）
- 詩集『多重露光』（思潮社）
- 北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員



松尾真由美 詩集『雫たちのパヴァーヌ』
アジア文化社刊 送料別1760円（税込）

佳作

- 「純化」 「父、母、僕の涙」 「お父さんの言葉を感じる」 吉井 裕
- 「自分を愛するために」 「初雪二〇二〇に」 「幸福な時間」 千葉チエンヅウ
- 「ロックダウンポエトリー」 「ロックダウンポエトリーII」 天ヶ谷麗
- 「カナヘビ」 「クリスタルアイランド」 「聖なる絵画」 栗山貴之
- 「枯渇下線SE」 「憤怒*炎舞」 岩尾宏紀
- 「静脈」 「夏は死んだ」 「inside」 つづかかない
- 「三月一日から僕はスーツを着るようになった」 「主観を想う存在だけ残ってれば世界は安泰」 「たばこを吸いたいだけがそれだけは最後の意地としてなんとか我慢している」 渡辺八暈
- 「磔」 「宵街幻燈」 「帰宅」 青木聡汰
- 「New Moon」 「祝婚歌」 「夜光虫或いは満界の星」 隅田聖美
- 「鋼」 「鴨川」 インバ
- 「春眠（一）」 「春眠（二）」 「春眠（三）」 「小山修一」 田中知織
- 「世界が終わる日に」 「木下駄」
- 「遠いところのちいさな家々」

- 「心の飛驒に羽を休めて」 西條由美子
- 「長男への同化」 「小径」 佐藤 裕
- 「めだか鉢」 「手触り」 「足跡を拾う、小瓶を解く」 小川茉莉
- 「雨上がり」 「遺棄」 氏家 忍
- 「幸福ゆき」 「まるい光」 宇川榛太
- 「最後の駅（旅立ち）つきささった月」 「すきま」 「坂道」 北原 満
- 「自殺」 「猫よ」 「マントラ」 三島佑太
- 「一枚のチケット」 「ダビデ像」 「樹海」 岩崎 明
- 「ユカリ」 「シガマ」 「メルツ」 今井 悠
- 「人工冬」 「石の男」 三ッ木健
- 「ある被爆者の証言」 星椎水精
- 「静謐な雨のために」 「殲滅RIOT」 「あの角を曲がれば」 篠崎フクシ
- 「哀しむこと」 「カレライス」 「カラス」 坂井 傑
- 「窓辺」 「手紙」 「モクレン」 橘いずみ
- 「夕微光」 土山育司
- 「罪」 「夢」 「生存」 東風佳子
- 「いじめ」 「学び匣」 「未遂」 そらこつむぎ
- 「魔獣の朝の歌」 「sunroom」 「虹の入り江」 浅見龍之介
- 「適齢期」 「合掌」 井川水穂
- 「こぼれ落ちる悲しみから」 「明日への勇気を抱き締めて」 三浦恵子
- 「私という、命を見つけた」

佳作

- 「終息」 「nyx」 「黎明」 南斗るい
 「霧遊病」 夏炬冬扇
 「脳髓に息づいている」 「狐が窪の土手に咲く」
 「真夏日」 「ちいさな世界」 「こども部屋」 惟村来帆
 「綾織る星のうた」 朝霧橙子
 「閉じる」 「ねじれの沈黙」 「ステファン・ボルツマンの恋」 鳥居さち
 「母の錯乱」 「あの日のこと 今のこと」 清水達也
 「んげんについて」 「おいろかいぎ」 「これからのあんた」 ふじたこうらこ
 「神様あのね」 「粉雪の降る頃」 「飛んで消えてく願ひ事」 夏目知佳
 「3分間」 「君に話したいことがある」 「エトスよろしく」 黒須奏帆
 「光の支配」 木塚康成
 「蚕蛾のお姫様」 「形而上の供物と形而下の廢墟」 山内裕史
 「躍動と鼓動と可動」 満島芍薬
 「暗室」 「わたしの…教育勸語」 「つれづれに生まれた子ら」 阿賀の狐 山河に生きる」 「漁師ブルー」 長谷川航
 「たぶんあのとき」 「美について」 「代弁」 山口たおず
- 「わたしとわたしの魂の速度」 「僕達の再生について」 星野瑞紀
 「未来」
 「末日」 「光は束」 「空の死に場所」 小林
 「信心」 「箱の中」 「完結の朝」 秋山祥吾
 「伝わる、伝える」 「必要な言葉」 「言葉」 ポール・ヴレー
 「営巣される記憶とたわむ覚醒」 「鳶に絡まれた黙約」 菊池優人
 「もがれてきた雌しべたち」
 「あの頃とその後の間で」 「愛を知るひと」 紺野 詩
 「空に抱かれたら」
 「マザー・ドーナツ・マザー」 「青い血はアンダーライン」 サカイ遠雷
 「ずっとそばに FROM TOKYO」 江野沢成二
 「紅葉の牢獄」 江野沢成二
 「ピアスホール」 「みつばち」 暁あさこ
 「蒼い桜」 深雪 朔
 「コーヒーカーップ」 「Dramatic Life」 「遙かなる夏」 楓悠
 「待ちぼうけ」 「岬の誘い」 「惜別」 中原賢治
 「見限られた生」 七 まどか
 「2020年春」 「鼻」 「獣の目」 鹿島楓
 「潜伏芽」 「動くことができない」 絹本ゆい子
 「巨樹と孤独と自由とわたし」 白山ワンダフル
 「退屈凌ぎ」 「星」 安堂
 「分かれ道」 「血脈」

コンピューター世界への危惧

五十嵐 勉

第一六回現代詩賞は、優秀賞レベルが多く出、昨年よりこの層は豊饒だったが、突出したものはなく、最優秀賞を選ぶのに難航した。私としては、柏原宥氏、清水一美氏、茉莉えま氏、葉師丸怜央氏の四人の中から、合わせて一本形式で二人を選ぶのも一法かと思つて望んだが、まず清水一美氏が、これまで何度も当選している作品レベルからあまり上がっていないことから外された。残る三つの中から二つをどうかとなったとき、松尾氏から葉師丸氏と茉莉氏について、異議が唱えられた。さらに、二つを当選にするより、一つに絞った方がよい、という主張に従い、結局柏原宥氏の、コンピューター世界への危惧を鋭く表した作品が最優秀賞に輝いた。

柏原氏は、以前同じ題材で、優秀賞を受賞しており、その作品と比べて、今回は抽象世界の異常な拡大とそれへの人間の依存の危惧がいっそう深められている。その点を評価した。巷にあまたある詩作品のなかで、この抽象世界への危惧を扱ったものは希有で、忍び寄る記号支配の未来を見据えた眼差しは、意味があると思つた。文芸作品そのものでさえ、コンピューターが産み出す時代である。創造の

領域さえ侵してくる。この危うさをしっかりと見据え、巨大な陥穽のありかを探る意志は重視しなければならない。好むと好まざるとにかかわらず、コンピューターによる支配は進んでいく。その警告としての柏原氏の「デジタルトランスポォーメーション」と「液晶の窓」は、重要である。氏には、ここに留まらず、もつとこの世界の危うさと、その裏面に拡大する人間性の喪失を暴き、剔出してほしい。祝意を送ると同時に切望したい。

優秀賞の茉莉えま氏の「母の骨」は読み応えのある作品で、現在のプラスチックで空疎な生活を「骨」という原点に遡つて呪詛し、やり場のない希求を、母性に求める痛切さは、深く響いてくる。母性に叫びを投げるしかない追い詰められた現実が、肉声として確かに届いてくる。それは「殺して」という言葉によって、命を切り結ぶ真剣の立ち合いにまで到達している。叫びの強さにおいて、最優秀賞でもよかつたが、部分的に生硬な言葉が残存している点で、もう一度見させてもらう機会を経たうえにしたい気持ちも残つた。先回以来成長著しいことも評価した。

葉師丸怜央氏の「業火」は、力強い剣舞のような趣が感じられ、「ボツ」「没」という効果音を仏教的な無常観に乗せて生への怒りを歌い上げている作品で、託す思いはよく伝わってきた。他の二作品よりも、この「業火」は特に結晶度が高く、収斂性が高く感じられた。もともと高い技術

は持っているが、技巧に溺れず、「思い」の深さを詩の根底に置いていくことを大事にしていけば、さらにスケール大きく開花しそうな気配がある。期待したい。

清水一美氏については、古典的な拡張を備えた詩の言葉は、相変わらずさすがと思わせるものの、同じ所に留まっている感じで、もう一つ発展性が乏しい。悠久な時間軸を浮かび上がらせ、その上に仏像の昔の時代における希求と落ち着きを蘇らせているが、高踏的な立場が、現代への響きを薄くしている。悪く言えば現代を遮断することによって高さと純粹さを得ている孤立がある。宿命といえれば言えは宿命だが、ここに留まってさらなる深さを求めていくか、打開して新境地を開くか、一つの岐路に立っているとも言える。

優秀賞、白神つや氏の「星下」は、柔らかい流れが快い

入選

- 「ノウツにふける、おんなだつ」 千ホウ現代シソウ
- 「令和元年八月十一日、山の日」 永島慎太郎
- 「とんでゆけ、ちいさな鳥よ」 「熟れずの生」 「星とともに」 小岩れい
- 「文学という明かりを追い続けた男」 細川明人
- 「僕らの感覚」 「人間の尊厳」 吉岡幸一
- 「蜜柑」 「車窓」 「命じる信号機」

- 「忘れ物」 「せいくらべ」 「泣くな、ものさしくん」 村上文緒
- 「また モリへ」 olea
- 「バベル」 「なかつた」 「そして今回も俺たちは変わらない」 夢沢那智
- 「逢瀬」 「懐かしさと」 「古い二才」 燃ゆる芥
- 「また、桜の季節」 「片眼のユートピア」 仙波寛人
- 「クウェイバー・レスト」
- 「夜の動物園」 「あれは、ほくです」 「星の舟」 鹿島 遊

- 「はじめに」 「あなたへ」 「海」 平岡 花
- 「新型コロナ戦争」 「縄張り」 「生贄の空」 諸井博行
- 「情景の中に」 「山桜」 「花筏」 葛岡昭男
- 「後ろ姿は清潔にー」 「心の容」 「このままだまって」 伊藤志郎
- 「リアルラブキル」 山名うみ
- 「国境」 「若きコンドル 私の息子」 「ライオンの眼差し」 松原泰子
- 「14歳」 池野太樹
- 「亡き家族」 「ミーが走る」 「泣き虫」 倉沢辰子
- 「笑笑」 「さかなびと」 七羽鳩子
- 「むかんせいなひびのこと」 「甲斐性のない朝」 「淘汰」 石丸麻綾
- 「魚族の血」 「口内炎」 「ふかぶかとねむれ」 やしき灯子
- 「結婚式」 「翔べ」 「ひと時」 横井純子
- 「J.S.Bach」 「天上の木」 世樹
- 「家」 「本棚のひと」 「色の欠片」 佐藤光江
- 「記憶」 「病む子よ」 樋口英子
- 「まどろみ」 「救済」 「林檎ジュースの空」 不破 堇
- 「見えないもの」 「この夜さえも」 「還る場所」 創まりの虚数
- 「何でもない芸術」 「軋む肋骨」 「佳日」 小石川尚
- 「雨の交差点」 「静かに道は眠っている」
- 「葬儀を終えた夜の夢」 上木戸晃
- 「過密地域における音楽の解放」
- 「羊についての簡易報告」 「五里夢中」 北 堅太

- 「変死、あるいは交響曲」 北上郷夏
- 「Underground」 「不揃いな恋人たち」 「君だけのブルー」 海月
- 「君は汽車を降り一人荒野を征く」 月夜野風
- 「ドブ」 「溶解」 「音楽」 森 由紀
- 「かげろう」 「黒い出目金」 「空の大蛇」 矢土りえ
- 「闇の踊り子」 「ひと夏」 「少女」 桜道優純
- 「果ての宇宙で」 「例壺」 昭架
- 「映写機」 「高炉」 「偽粧」 真論子
- 「のっぺらぼうの涙」 「ある夕暮れのこと」
- 「なめくじら らんらん」 いまだまりこ
- 「ハコの中で生きる」 「街角」 「バス停」 沖田 有
- 「アルケミストの待つ島へ」 「生きることのつらさと喜び」
- 「優しさ」と 高倉麻耶
- 「螺旋」 「背徳の愛」 「血は流れる」 當島伊織
- 「燦然」 「囁りのエチュード」 「真実」 月海水雲
- 「土笛を吹く」 「リラの街」 五月月 彩
- 「処女航海餞の辞」 「表現の海抜」 「砂詩」 齋藤圭之介
- 「暗闇は君のためにある」 「あの夏へ」 「浮世離れ」 瀬戸成海
- 「三ノ輪浄閑寺」 「鳥類園」 「一分間に」 野上 卓
- 「介護の魔法」 「one of them の君と僕」 「続く世界は一夏の青」 清水将也
- 「炎夜」 「浜辺の二人」 「森の小径」 加藤光哉
- 「飼育」 「時代の貧困」 「あかい夕焼け」 高橋蒼太郎

着眼はユニークで、日常のさりげない空間や時間が一つの詩の世界で異相を持ち始めるのは、氏ならではの世界だろう。ただ、私は日常を異次元へ転化するそれだけでは、物足りなさを感じる。変わっていて、発想は意表を突くが、ではそれ以上のものがそこにあるかどうかと問い詰めれば、それ以上のものは見出せない。その点、エッセイなどの方が、氏の内面の深さがより明確に伝わってくる。どちらに比重を置くべきか、そろそろ考えてもいいのではないか。

洛田二十日氏の「0527『らふランチ』定例会議議事録」サラリーマン生活の中での組織の中の会議を詩にしたものだが、詩としては変わっている状況であっても、会議で眠って夢を見ている模様から抜け出してはいない。実際の会議中に書いたということにどこまで価値を置くかと問われれば、それほど大きな意味はないだろう。変わり種としては認められても、本物の詩であるかという点では、疑問は抜けず、むしろこういう状況でないところで書かれた作品を読んでみたい気がする。

奨励賞については、いくつか印象に残ったものを挙げたい。

「禍」は世界に対する反抗の姿勢を詩の言葉として明確に表現し得ているし、鋭い皮肉は、しっかり刃となって斬りつけている点は評価するが、ペンネームはいただけでない。「タダノヒト」という名前は、名前になっていない。パンチ力

いた。と同時に、「茜色」では、失ったものが彼方の西方浄土で自分との再会を待っているような、壮大な橋にまで思いを膨らませているところに、発展的な回帰を感じた。仏教の極意に通じるイメージに到達を覚えた。

一橋省吾氏は、大きな活字を混ぜたり、行に一字ずつ傾きを加えたり、言葉の一部を赤くしたり、技巧に大胆な工夫を重ねてきて、幅を広げた。また言葉遣いそのものも、リズム感を持って、奏でられていく。これまでから飛躍を遂げたと言っている。「かろみ」を保持しつつ足をしっかりと地につける何か重要なことを会得したようにも思える。これは賞賛していい。

今回は、特に佳作と入選の数が多く、前年の一・五倍近くあった。これはその層が厚くなって、全体のレベルが上がっていることを示している。今まで高い評価を得ていた人たちも、少しゆるくなると、下へ行ってしまうし、中学生や高校生もかなりのレベルのものを書いているので、下から上への突き上げも、盛んになってきている。この中間層の充実と賑わいは、全体としては喜ぶべきことだろう。この薙き合いから当然同じ佳作にも開きが出てき、奨励賞に極めて近い、いい作品もかなりあった。

岩尾宏紀氏の「枯渴下線SE」は、詩の位相が現実を暴くポジションを得ていて、強引な斬りつけが快くもある。言葉の展開力はかなりのものがあるので、めげずに持続して

もあり、せっかくの言語センスを持ちながら、ペンネームが作品を損ねている。言葉の遣い方は、当然ペンネームにも反映されるべきで、こうしたペンネームは詩への姿勢を疑われるだろう。詩の内容は優秀賞レベルでありながら、ペンネームに見られる言葉への粗雑さが足を引く張った。

井上珠希氏は「稜歌」に見られるように、言葉の根に古典の格調を漂わせているところが魅力だが、美の詠嘆に溺れることを終着とする傾きを感じられて、惜しまれる。むしろ「渡悔」のように、力強く疑問を呈していく詩風を大事にすることが、飛躍に繋がるだろう。

連続して七回の奨励賞となった麻生ゆり氏の詩は、近年特に彫琢を深くしていて、私は優秀賞のレベルと認めているが、この力を、有無を言わず多数に認めさせるには、ポリウムを大きくして、長い詩に挑んでみることも有効だろう。構成を加えた量感の伴った詩も、その細やかな言葉の綾織をいっそう生かして、より大きな光を放つかもしれない。時間をかけて挑戦して欲しい。

遠藤芳子氏もかなりの回数奨励賞を重ねていて、毎回読むのを楽しみにしている。当初は、失ったものへの痛切な愛惜が胸を打ち、それが詩の核になっていたが、最近そこから脱却してより普遍的な、より大きな世界への広がりを感じられるようになっていた。今回もその方向にあって、この世界を許す寛大さに希望と救いを得て、翼を滑翔させて

いけば、開花が期待できる。私はこの三作品を評価している。掲載してみたい作品である。

てづかかなこ氏は思い切った言葉が小気味よく、断裁力を示していて、魅せられるものがある。ただ、詩がそれぞれ短いので、もう少し量感が欲しい。積み上げる力や流れを盛り上げる力が備われば、もっと普遍性を増す。期待したい切れ味がある。

天ヶ谷麗氏の「ロックダウンポエトリー」は一枚に一つの単語があったりして、斬新ではあるが、それで胸をグツサリとまでは行っていない、奇を衒うに留まっている。もっと実質的な言葉を紡いで、それ自身を強力にして欲しい。せっかく「ロックダウン」と言う強烈な言葉をタイトルにしているのだから、その大きな事件性を詩の立場から解剖して、露わにしてみたい。お上品な肉料理では、インパクトはない。

栗山貴之氏の「カナヘビ」は視点の鋭さがあって、おもしろかった。カナヘビとビル街との対照が生きている。この鋭さを展開していけば、興味深い詩世界が実現する。次回も読みたいと思った。

「紅葉の牢獄」の江野沢成二氏も紡ぐ力があり、造形力を感じるが、赤と血を結びつけるのに紅葉を用いるのは、やや触媒に欠ける恨みがあった。また最後に繰り返す置くのは安易で、それによって全体が損なわれたのは惜しまれ

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靱な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

作品募集要項

趣旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らしめ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る（3篇の場合まとめて送付のこと / 添付別紙は全体に対して1枚のみでよい）。1篇でも2篇でもよい。

応募資格●不問

※恐縮ですが応募審査料1500円を御協力くださいますようお願い申し上げます。郵便為替には無記入・無押印をお願いします。

応募規定

一篇は2000字以内（原稿用紙使用の場合も必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格）。3篇以内。応募審査料全体で1500円を郵便為替などで同封のこと。

ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門（2021年度第17回現代詩賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム・それぞれふりがなを④年齢・生年月日・性別（これらがないものは失格）⑤〒（郵便番号は必ず明記のこと / ないものは失格）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。⑨応募審査料1500円を郵便為替などで同封。外国からは14USD。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取りコピーを送付のこと。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名7万円 / 3名5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●松尾真由美・五十嵐勉

締切●2021年5月31日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表。

受賞発表・最優秀賞および優秀賞作品掲載は12月25日発売の82号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂の響きを期待しています。



五十嵐 勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ

79「流瀆の島」で群像新人長編小説賞受賞

98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞

2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

他に中篇小説集「ノンちゃん、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

る。もっとたくさん詩を作り、叩かれたり、推敲を重ねたりすることで、練度は高まると見る。将来の結晶を期待したい。

詩は現実との対話であり、世界と生身で向かい合うことでもある。この世界には、もつと侮蔑し、憎み、呪い、叫びたいことがたくさんある。呪いを深く重ねて初めて祈りに到達するのかもしれない。それほど断罪したい運命が満ちている。この世界が平和で平穏であるはずがない。命という限りあるものの中に閉じ込められているそこにこそ、声を投げて何かにぶつけたい言葉の衝動がある。その弾丸で現実を突き破って欲しい。そこに永遠に通じる精神の華が咲くことを信じている。



現代詩賞選考会風景 2020.11.3 アジア文化社図書室で

デジタル トランスフォーメーション

仮想現実 拡張現実 複合現実 代替現実
高精細映像のホログラム 没入感 臨場感 超リアル
もっと大量に もっと高速に
人間とコンピュータ 膨張と加速の連鎖

これはまだ前駆的なものに過ぎない

非常に危険な装置が

実際に作動するときを待っている

イ マ ワ マ ダ ダ レ モ
ソ ノ オ ト シ ア ナ ニ
キ ヅ ケ ナ イ デ イ ル

切り裂かれてゆく言葉

言葉の破片 その破片のサンプルが

大量に 高速に 仮想空間を低回する

奥深い感情の構造 むくめく細胞

血液 鼓動 そして呼吸

媒体に刻まれた関連と因果
砂を噛むような問いの羅列

精神に去来する様々な波動

その波動の やわらかな曲線が

削ぎ落とされ 消し去られていく

想像もつかないような世界の変化へ

ただのつぺりで無機質な電磁波

不毛の闇にからめとられてゆく人々の群れ

出口の見えない空っぽの精神

顔も 声も

肉体すら 存在しない

もっと大量に

もっと高速に

人間とコンピュータ

膨張と加速の連鎖はつづく

柏原
寤

増殖する言葉
その培養エネルギーが
液晶の窓から溢れ そして滴る

「像」の亡霊たちの果てしない荒野
その荒野の窓を

タップ！ ドラッグ！

スワップ！ フリック！

指先に纏わりつく幻想の粒子

構造

集積 拡散

おおよそ人間社会の

距離 時間 質量

秩序 自由 服従

責任 平等 階級

私有 共有 真実

を、根こそぎ変えてゆく

液晶の窓

柏原 宥

かいばら ゆう

1965 埼玉県川口市生まれ

システムエンジニア

2016 第12回文芸思潮現代詩賞
奨励賞

2017 第13回文芸思潮現代詩賞
優秀賞

受賞の言葉

柏原 宥

詩を書く上でわたしに欠けていたもの、それは覚悟だった。昨年度の選評で五十嵐先生から手厳しい言葉を頂いたが、その言葉を通じて、詩を書くにあたっての覚悟が、わたしには欠けているのだと悟った。わたしはわたしが書くべき詩を、覚悟を持って書いていく。今後この思いにブレが生じることはない。

わたしには技術的にも精神的にもまだまだ未熟な点がある。だからこそ、書いては評価を仰ぎ、評価を仰いで書いていく、この反復のなかで成長していくしかない。

今回の当選を機にまた新たなスタートラインに立った思いだ。今後も精進していきたい。

エンコード

2624

0010 0110 0010 0100

94fc 82b5 82e2 8cbe 9774

1001 0100 1111 1100

1000 0010 1011 0101

デコード

0010 0110 0010 0100

2624

ビット

プロトコル

仮想

現実

空間

時間

感情

液晶の窓に浮揚する

「像」の亡霊たち



増殖する言葉
その培養エネルギーが
液晶の窓から溢れ そして滴る

「像」の亡霊たちの果てしない荒野
その荒野の窓を

タップ！ ドラッグ！
スワップ！ フリック！

指先に纏わりつく幻想の粒子

構造

集積 拡散

おおよそ人間社会の

距離 時間 質量

秩序 自由 服従

責任 平等 階級

私有 共有 真実

を、根こそぎ変えてゆく

液晶の窓

柏原 宥
かいばら ゆう
1965 埼玉県川口市生まれ
システムエンジニア
2016 第12回文芸思潮現代詩賞
奨励賞
2017 第13回文芸思潮現代詩賞
優秀賞

受賞の言葉

柏原 宥

詩を書く上でわたしに欠けていたもの、それは覚悟だった。昨年度の選評で五十嵐先生から手厳しい言葉を頂いたが、その言葉を通じて、詩を書くにあたっての覚悟が、わたしには欠けているのだと悟った。わたしはわたしが書くべき詩を、覚悟を持って書いていく。今後この思いにブレが生じることはない。

わたしには技術的にも精神的にもまだまだ未熟な点がある。だからこそ、書いては評価を仰ぎ、評価を仰いで書いていく、この反復のなかで成長していくしかない。

今回の当選を機にまた新たなスタートラインに立った思いだ。今後も精進していきたい。



空間

時間

感情

現実

仮想

プロトコル

ビット

2624

0010 0110 0010 0100

デコード

1000 0010 1011 0101

1001 0100 1111 1100

94fc 82b5 82e2 8cbe 9774

0010 0110 0010 0100

2624

エンコード

液晶の窓に浮揚する

「像」の亡霊たち

母の骨

葉莉えま

火葬炉から出てきた母の骨
かつて私のゆりかごだった 骨盤 のかけら
コーヒー缶に、そっと詰める
まだ少し温かい骨が、指先をかすめた

あの日から、私の爪先は、ずっと、冷たいまま

時々思ってしまう

私の身体は塩化ビニルで出来ていると

燃やせば蛍光ピンクの煙が出る

臓物の類は後付けデバイスで

空洞だけが内側に抜がっている

模造された偽物の人間

カッターで切り付けてみて 漸く

血液が通っていることが理解出来る

醜いケロイド

ガラス製のコーヒーサーバーに、母の骨を入れ

時間をかけて、コーヒーを淹れる

喉元を焦がし食道から胃へと落ちてゆく液体

延髄に蔓延った孤独は血脈に運ばれ、全身へと巡る

一人、という明白な事実

パソコンの時計表示が、午前四時二十三分を報せる

検索エンジンは、私の病を治してくれない

トイレットペーパーがなくなっていたことを思い出す

しばらく何も食べていない

明け方のコンビニは、人間の臭いのしない遠い国の砂漠みたいだ

人間の気配がない、人間の視線がない

トイレットペーパーと、食べ物を買う物かごに入れる

おにぎり二つ、サンドウィッチ一つ、菓子パン多数

人間が、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「温めますか」の質問文に、首を横に振ることしか出来ない

【社会不安障害】という病名を私に付した医師は
無機質な診察室の中、カルテだけを見つめていた

路面で猫が死んでいた
 満天星の香りが、鼻腔で蒸れる
 葉桜たちが、朝陽を浴びて煌き始める
 山に降り積もった冬の残滓が、融けだしている
 私の背骨の隙間を漂う、冷えた東風

存在を、証明してほしかった

確かな数式なんかじゃなくて

ここにいて、認めてほしかった

ただ手を握っていてくれればそれでよかった

何もできないことを、許してほしかった

ただ頭を撫でて、「私」を受け入れて

「私」を、見て

もう何日も洗濯していない服を脱ぎ、洗濯機に放り込む
 湯舟に浸かり、臉を覆い、自分の範囲を確認する
 濡れた体を、古びたバスタオルで拭う
 新鮮な下着と服で、身を覆う

窓を開ける

突風

記憶が、捲られてゆく

海馬に負った火傷 母の胸に抱かれて祈った夜

産まれてきたくなど、なかった

正確な音程の子守唄 規律正しいテンポ

産んでくれとも、頼んでいない

母の隣は心地よかった 柔らかくて 温かくて

いっそ殺して欲しかった

母の弾くバツハは 力強く 厳格で

私を殺して

母の性格そのものだった 私はそれが 好きだった

殺して

薄いカーテン越しに届く朝の風景

緩やかな風が、部屋に流れ込む

他者たちの生活音が、窓の外を埋めてゆく

母の骨を掌に抱く

外の世界は、今日もまた、忙しい
上手く、生きられなかった
カラフルな薬剤を、一息に飲む
さよなら

冷蔵庫が、唸る

私を置き去りに、勝手に死んだ母

掌に、じわり、厭な汗

瞬間、母の骨が、融けだす

私の中に、浸透してくる

私の爪先を、温める

血液が、流れる

涙が、零れる

「お母さん」

心臓が喚いて

私は、私に注がれた命の体温を、知る



茉莉えま

まつり えま

岩手県出身・在住

第15回「文芸思潮」現代詩
賞佳作受賞

中学時代に茨木のり子氏の作
品と出会い、詩作の真似事を
始める

Twitter (@iamLeeEmma)

受賞の言葉

自分の詩で誰かを救いたい、だとか、誰かを励ましたい、なんて、そんな大それたことは思っていない。救われるのも励まされるのも、受け手の心ひとつだから。それでも願って止まないのは、少女だった私の心の、あのワンルームアパートで毎日蹲り泣いていた私の心の、慰めになるような、支えになるような詩を書くことだ。それが結果、誰かに響くのなら、それでいい。

詩を書くことに真剣になればなるほど、その難しさに躓くし、時には嫌にだつてなる。けれども、うんうん唸りながらも美しく輝く言葉を見つけた瞬間、楽しいと思ってしまう。詩を書いていてよかったと、心底思ってしまう。そうやって悩んだり歓喜したりしながら、私は詩を書き続けていくのだろう。

この度は誠にありがとうございました。

茉莉えま

十一面観音——聖林寺

忌み捨てられ
塵に塗れた祈りが
神鎮まる山の辺
数多名もない
蔑まれた願いの
空色 諳んじる
熾を抱き仰ぎ見る
紫水晶の帳を
解いていく
朱ほのの階調に
天を平らかに
吹き渡る風が
降り立つ蓮の朝
匂い咲き出で
差し招く光儀
なやかな指の
爪弾く静寂に
醸す浄土の響き

終わりなく
湧き出で
始まりなく
流れ去る
移ろう空の
色に顕れ
結ぶ祈りは
恵み巡る
光の環
さあ渡ろう
どこへも
どこにも
ただ今
ここに

清水一美

生まれない前
祝い調える
父の父の母の母
星を息吹く
満ち引く潮に
わたくしを標し
安らい誘い
通し奏でる
流れを源に育む
滴る光の縷々
奪い争う修羅ら
取り零した密に
そばだてる月を
振り仰ぐ前
ほの白む遠く
己の知れない
願いの累々を
碧に重ね俯する
菩薩の呼



清水一美

しみず ひとみ

1960 青森県八戸市生まれ
大学入学とともに上京
英文科でジョン・キーツ、日本文学科
で堀辰雄をそれぞれ卒論として専攻
文学を志し、アルバイト、フリーの校
正者で糊口し、森敦「月山」を追体験
すべく八ヶ岳の山小屋で越冬
下山後、某通信会社系列の契約社員と
なり、定年後現職に就く
奈良と縄文をテーマに詩作を継続中

受賞の言葉

——覚束ない一步を

清水一美

白洲正子が歩いたその道を私は、変形性膝関
節症の兆候が現れる中、またその病を不完全な
がら克服した後、都合三〜五回は歩いただろう
か。なんとも覚束ない一步を、天平の傑作に見
える歓びを胸に重ねた。観音菩薩から降りて来
る言葉を待ちながら、その前に座り続けた。そ
して、ようやく結ばれた祈りの言葉を、今は細
やかに祝いたい。

ボツ

ボツ

ボツ

ボツ

鼓動の前科蛇行す

口無し群衆の共鳴 たかだか

撰氏四〇〇〇度の灼熱のために

薄化粧に猷花を拵えずとも

煙草味の着衣と若白髪は刹那

爛れる間もなく くろずみ

小指の骨さえも

ウシナフ

ボツ

ボツ

ボツ

ボツ

イノチノサケビ

ノドカラヒトサシ

ボツ

業火

薬師丸怜央

ボツ

ボツ

ボツ!

捻り殺した

螺旋の搾取

鈍痛つまり快感

生温き風呂に浸され

のぼせ 矛盾 シンナーの臭気

小指ちぎり かわした はずが

おまえはなぜに 孤独残し

親指亡き坊主の袈裟に無言のライター華散らす

ボツ

ボツ

ボツ

!ボツ

コンナクロコゲノドウタイナンカ ワラデクルンデイタノセテ

ソシテソノウエデツミナキオサナゴタチト

オシクラマンジュウデモシナガラツブシテシマエ!

ニクガツブレナニカガモレテ

ホネモフクザツコツセツデモシテシマエ
 サイゴニハイダラケノナマクビガ ドツジボールノタマミタイニトンデクルノダロウ
 ソレヲワタシハオサナゴカラカッサラッテ
 イドノソコニホウムッテヤル!

灰暗い 涸れ果てた 堅い井戸の底に ネ

ボツ

ボツ

ボツ

ボツ

鼓動が鼓膜に
 バチで何度も
 提灯だらけの
 くだらない祭
 地面りんご飴
 罪のない金魚
 夏終わり花火
 開いて消える
 テヲノバシテモ
 冥界サマヨウバカリ

受賞の言葉

薬師丸怜央

風のような平穏が刹那的に覆り、無口な者の胸中の激越な渴望を汲み取る。進むべき道の葛藤や映画音楽の世界観への陶醉、早逝した旧友との古い記憶が果食う穴……。眼前で瞬く間に結晶化する言葉達に息を呑む。詩作は時に美しく、時に凄惨である。だがそれが少しでも誰かの心と共鳴し得たのなら、これ以上の喜びはない。
 この度私の大切な作品達に優秀賞を授けて下さった皆様には、心より感謝申し上げます。



ポツポツポツポツポツポツポツポツポツポツポツポツポツポツポツ
 踊る踊る
 善人罪人 鉄薙ぎオドル

このじりじり照る 冷酷な揺らめき ワになつて

どの顔も蒼だ どす黒き蒼だ

冥界キャンバスと化す

融解必至

無間地獄

月光隠蔽

跋扈雲泥

夢現神羅万象肋骨尺骨温熱帯火傷疫病転移再発後遺症焼跡爆撃捨身

最早恍惚

最中慟哭

遺失物Ⅱオマエ

遺品焼失

無縁の人間手繰り寄せ!

没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没! 没!

薬師丸怜央

やくしまる れお
 1992 茨城県生まれ
 千葉大学薬学部卒業
 会社員
 第15回「文芸思潮」現代詩賞より応募を開始
 主に詩と小説の創作活動に励んでいる

星下

白神つや

子供の産毛が落ちてゆく街の速度で、倒れゆく途中の日々に。

順序どおりにわからなくなっていく名前、の成長痛がかつて住んでいた家の柱にひとつずつ彫られていつている、そんな予兆がした。しかし、それすらも

どうでもいい気がして。そう、

でしよう。いま風ぐものは

父に殴られたとき、ぼくに弟ができたみたいに階段をひとつずつすすんでゆく。

まるで平坦な階段を、そのはじまりへ背丈の変わらぬ弟を置き去りにして、彼から盗んだ肢体をまた一步のたび落としていった。

弟の舌を見せるとき、先生は素直でいい子ねとぼくを褒めたことも

あった。頃によく遊んだ近所の公園へと、駅前で迷子になったから仕方がなく向かうことになって、前髪だけが靡くように

みあげた。昔より辺りの街は高く見えるが、どこも廃墟になっていた。

つつじ公園の、撤去されたブランコ。

残された鉄柱に白昼だけが飲み込むように凭れかかっていた。

ずっと前には、そこらじゅうにたくさん光が突き刺さっていたが、

けれどだれもない公園では、ぼくの足下にある腐った水溜まりに、底から泥の吹き上がる錆び付いた噴水の幻聴。

耳をすませているのか？ ぼくは。

もうよしてくれよ。

なにもそこに落とされる刃物などないのだから。

ベンチの裏の茂みのあたりに隠した名札の針は。腐食した滑り台の階段を逆さまに落下してどこにも留まれなくなった。

白昼夢で満ちはじめた。飽和している街をぼくの持て余す無記名の名札では、その内側を突き破って出てゆくことはできないだろう。

たくさんの誤解をした持ち物は、すべて失言のためだった。ひとつとして、掃除の終わった部屋のような閉鎖都市を蹴り倒してゆけるほどの靴は履かず。形崩れを起こしているシルエットたちはしめやかに海へ姿をくらませた。

その泥水だけを散らかしながら。

引越してから、ぼくはみにくい化け物になった。

舐めるのだった。みさかいなく、ぼくの雨樋を通りそうなものなら。それが、ふれられないうつくしいものだって、触れるようになった。

タイヤ痕が部屋の壁にきれいに並べられるよう貼り付いている。乾ききった唾液でくっついていて。

父さん、とても賢く育ちました。あなたから生まれていない子供が。まだまだ食べ盛りの大人が決して割れぬ窓にもたれかかって、雨水の匂いを求めて。うつくしかった、ものを美しいと口にするだけの。

歴大な夜窓を閉じられたまま、その墜落を何度も見送った。落ちてゆくさなかにガラスへ映りこんだ、

どのような雨雲の形も、日が昇れば
いずれ晴天にすべてが整列するように、流れるだけだろう。

朝になって部屋に座礁した難破船。ふいに振り返れば、そこにはなにもなかった。

白く飛んだ昼下がりの、夢のふちで

忘れてゆくことだけを思い出す末路に倒れきる、

その寸前で止まったままの。今朝きみ、になった影。

歩き方を知ることはずっとないのだろう。

目の前のほんとうの路のことに、ほとくの天体望遠鏡はどこまでも未知だった。けれど、

この唇はなお、あの青空を飛ばうとする。

声が言葉になってゆく途中に、その道筋のずっと先までを言葉が決めてしまうような軽薄さで。

だから、一言目にさえとても怯えているのだ。

壊してしまったと誤解した、街や風や空のレットルが、

じつは片付けられていない部屋のゴミ箱のように散らかって

どのような結末にも届かず、生きながらえて絶えず続く。ぶきみな明滅の星の下で

「どうでもいいんだ」

なんて しまっておくように蓋をしたつまらぬ星くだりのごとく

悪癖を醸して。



白神つや

しらかみ つや

1995 東京都生まれ

さいたま市在住

Twitter :

@shirakamitsuya

受賞の言葉

白神つや

今回選出頂きました作品を書いていた当時を振り返ると、自身の内から伸びた手の平に映る世界に私は包まれていて、耐え難いその内包された景色の中もがいていた形跡としてあの現象は今も詩という一粒の時間の死亡を迎えることが出来ている、と思われず。そして紙上や電子上で私というまた一人の読者をとても新しく享受しているのかもしれない、と感じています。この度は、このような身に余る機を本当にありがとうございます。

ネオの詩

シール布施

葉の光が飛び散って
ネオの足が長くなっては
白魚が池から池へと
放射線状にダイブする
鼻を擦る僕のメランコリックな
習性から
森林の影が揺れる
むず痒くなって
何層にもなっている
木の実に火を付けて
吸いつきは、
咲き行く

「花粉症？」

「違う、目が痛いんだ」

僕とネオが余りにもはしゃぎ
走り回ったから部屋が消失した。
僕らが走るとき
風となる木が優しい分裂を繰り返しては
呼吸が嫌に上手くなっていく
目を合わせれば言葉を忘れていく
どこへでも行けるね
ええ、どこへでも行くわ
視線を渡せば、身体が繋がってくれる
ネオの背中の鈍さに、
もう会ってはくれないことを悲しく思った

ああ、非幻想の散り行く才能が何層にもなって
苛む水が互いを捨てさせる魔力
呆気ない時間切れのロジック

（春に部屋は消える／言葉なくとも知っている

（親鳥は宝石の羽の煌めきを知らずとも／

その悲しみの色を描くことが僕たちには可能である

不透明な果実がシャツを黒くさせる

僕の涙は叫びと交じり、

ネオの脊髄に噛みついた

どんなものでもヒビを入れるから

どこにも行かないで欲しかった、

だけ

病の臉は完治しない

赤くなる唇は他者を浮かび上がらせた

それでもネオ、君はそうして旅立つか

（おかしくなりそう、だけど言葉に出来ないよ

森林に壊された、森林が壊したこの心

（おいで、ネオ。二人で、きつと、もつと、恐らく、

安らかに風が掛けてく

欠けてく数字

もう会う日は訪れることはない

土となり生く僕ら

あんなに綺麗な感情も駆けていく

31

42

510

3

0.8

0.8

7

6



シーレ布施

しーれ ふせ

2019 和歌山信愛高等学校卒
現在 神戸女学院大学学生

受賞の言葉

シーレ布施

優秀賞受賞を賜り、心より御礼申し上げます。
私は、詩というものは、私ひとりではなく、神様と
一緒に書いていくものだと思っています。選者の皆
様、そして、また神様に深く感謝致します。
これからも、この感受性で、命を編むようにして、
言葉を紡ぎ、清潔な詩を生んで行きたいと考えていま
す。それが皆様の柔らかな心にそっと、埋もれること
ができたのならば、それ以上に嬉しいことはありません
ん。また作品を通して、どこかでお会いできる日を
楽しみにしています。この度は、誠にありがとうございます

行かないで

行くな

行くなよ

生まれ、僕たちのアナロジー

ああ、痛い目

裂けるこの心臓が見えていずとも
覚えてる

「ねえ、花粉症？ 泣いてるよ？」

「違う、全てが惜しいんだ」

従順な歩みをきみにうながす
 隅に対せばしなやかな針となつて
 直角を削る
 散らばっている日常の残余を
 あつめる穂先は繊毛にもなり
 昇華を忘れた半透明のかなしみを
 からませていく
 食卓の下で息をひそめている
 トマトの蒂 ビスケットの粉
 ちいさな怒り しばられた言葉も
 渴いた摩擦の音階で引き

Routine
 吊るされているきみを
 きょうも迎えにい
 狭い居間の窓をおおきく開ける
 質直に穹を食んできた風が
 影を隠してうづくまる温気を
 たまゆら逃がしていく
 きみの細長い胴の先には
 平らかに束ねられた穂たち
 絨毯にまっすぐ立たせる
 おしつけてはいけない
 右から左 手首を返し 左から右へ
 穂先は柔和にひらかれ
 短い毛と毛の隙間に入りこむ
 擦れる声でかき出してきたのは
 きもう わたしという生物から
 痛みも残さず剥がれていった
 皮膚のかけら 数本の髪

中村郁恵



あたらしい空気を招き入れた
 稠密する穂の向きをなで整える
 陽が斜めにしか射さない壁に
 また吊るす
 率直に垂れるきみは
 刈られるまで青く吹かれていた
 風の輪郭をなぞって眠る

受賞の言葉

これまで数多の詩に触れては感じ入り支えられてきた。自分でも細々と詩作を続けてきたのに、「詩とはどんなものか」と問われても未だ明確に答えることができずにいる。だが、詩のかたちに恃まなければ表現できない心の動きは確かにある。眼に映らないもの、掴みきれない感情の纏れなど、横溢を止まない事象の庭で育った言葉をこれからも編んでいきたいと切に思っている。選んでいただき心より感謝申し上げます。

中村郁恵

中村郁恵

なかむら ふみえ

1965 北海道札幌市生まれ
 現在、札幌「グッフォーの会」にて
 詩作を、函館「800字の会」にて散
 文を精進中
 第11、13、14、15回文芸思潮現代
 詩賞奨励賞
 第12回文芸思潮現代詩賞優秀賞
 第14回文芸思潮エッセイ賞優秀賞

この夜とくれば四角いので 港と港と港の間に ちょうど挟まる
波になりたそうな水 つかまえて飲む
食べられそうな干支 ちよつと食べたなら つぎの神様を印刷してください

この世界にいまだかつてバーベキューが行われていない場所など残っていない

以上で今日の神様は終わりです おのおの おのおの お願いします
なんだか今日は僕が多いし なんだか今日は僕が多いな

もう始まっていますかももう詩はもう始まっていますか会議はとつくに始まっています議事録をとるのが僕の仕事ですでも先に詩が始まってしまいました。呼ばれました資料を配りますこれも大事な仕事です「09:41」に下書きが保存されました「僕が後ほどこのファイルを共有したとき皆さんはきつと今日の会議内容が書かれていると思うでしょう」「09:41」に下書きが保存されました」

地面の下へ行くにはお金がかかるけど

犬の種類を増やすのは無料だそうです 駅員さんに

せんぶ間違いでした っていうかっこいい紙をもらう

右の車両から順に錆びていきます ご注意ください

今のアナウンスで気づきました 僕が右を向けることを

紹介します 僕の右です 夜の半分です

今すこし詩が止んだかもしれないかもしれません今のうちです議事録には本来この夏おすすめの穴場バーベキュースポットのロケ候補地を書かねばなりませんでしたあまた呼ばれました「09:42」に下書きが保存されました「ちよつと百年潮れてきますこれも大事な仕事です」「09:42」に僕が百年潮れました」

会議はとつくに終わって これからファイルを共有します

開いたところで 議事録が これだなんて

謝ろうにも 謝ろうにも 僕なんて ただの主語で

せめてものお詫びに 議事録の句読点と 僕の数を おんなじにしました



受賞の言葉

洛田二十日

朗報に沸騰しそうです。ある会議中、とつぜん詩への欲求が破裂しまして、横溢するままにタイピングしたものを下敷きに書かせていただきました。「議事録」というタイトルは強ち嘘ではありません。会議中に詩を書くだなんて、社会人として失格ではありますが、このような結果に繋がりに、感謝しかございません。後ほど、ちゃんと怒られました。でも、その時は会議より詩の方が、よっぽど大事だったのです。

洛田二十日

らくだ はつか

1990年生まれ。新潟市出身。東京都在住。早稲田大学文化構想学部卒業。大学卒業後、放送作家事務所に所属。テレビやラジオ番組(TBS)など制作スタッフとして勤務。第2回ショートショート大賞受賞。2018年に単行本『ずっと喪』(キノブックス)で小説家デビュー。詩での受賞は今回が初。

今は実家で犬の種類を増やしています
交配させるたび

だんだんと ビシヨビシヨの犬しか生まれなくなり
両手でかき集め 一箇所にまとめて「333に犬の海を作りました」

百年が経って

バーベキューが行われていない場所どころか

印刷されていない神様も 食べられていない干支も ありません

右を向いてください

この議事録が潮風で錆びてしまう前に

どうか右を向いてください

かわりに紹介します あなたの右です 夜のもう半分です